

古代エジプトにおける創造神話について

——メンフィスとヘリオポリスにおける——

山 崎 亨

序

第1章 メンフィスの創造神話

第2章 ヘリオポリスの創造神話

序

旧約における天地創造の記述は、創世紀1：1—2：4aと同2：4b—7との二箇所に現われ、前者が祭司記者によるもので500—400B. C. 頃に記述され、後者がヤーウィスト資料に属し、900B. C. 頃に記録されたものであるとは、議論の余地を残しながらも、受け容れられいるところである。

さて創世紀1章の記述の最初の部分に並行するものとして古代バビロニアの *enumaelish* と称せられる七個の粘土版¹⁾ が挙げられてきた。いまその粘土版の第1枚の最初の数行を訳してみるならば、

「高きところにおいては、天にまだ名がつけられていないとき、
下では大地がまだ名で呼ばれていないとき、
彼等を生んだ始源 Apsu (混沌) と
彼等を生んだ Mummu-Tiamat (大海、旧約のテホーム) と、
それ以外には何も存在しなかった。」

粘土版の第4枚の135行においては

「彼 (マルドク神) は彼女 (Tiamat) を貝のように二つに裂いた。

その半分をもって空を張った。」

旧約とこの *enuma elish* との共通点は、前者に「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり」(創1：2)と記されていることの中に、混沌が最初にあり、やみがあって、そののちに光が造られたことである。

しかし旧約の「神は『光あれ』と言われた。すると光があった」と述べられている点、すなわち新約ヘブル人への手紙11:3「この世界が神の言葉(rhēma)で造られたものであり……」に要約されている信仰は古代バビロニア文献からは出てこない。この点についてはエジプト側に注目しなければならない。エジプトの宗教思想の中で言葉と実在との関係に最初に言及したものは「メンフィスの創造神話」であった。

なおエジプトの創造神話については、この「メンフィスの創造神話」と共に重要であると思われるのは後述する「ヘリオポリスの創造神話」であるが、両者とも各々すぐれた特徴をもっている。

これらの創造神話は明白な文献として後世まで伝えられてきたが、その理由は新年に、古い年を送り新しい年を迎えようとするときに、天地の創造を思い、多幸を祈ったからである。王の在位が新たに確認された Sed 祭においても太陽神の世界統治が新たに讃美されていた。

アビドスの碑文に下記の箇所を見出す。

「王よ汝が王宮に出廷するは、Atum 神が地平線に現われるが如く、
汝が王宮の間に坐するは、ホルス神がその玉座に坐するのと同じ、
汝が Sed 祭に輜(かご)に乗って現われるのは、
Re 神が年の始めに現われるのと同じである」。

(Sed 祭は30年目ごとに行われる国家的祭儀であった。尚この文献は Mariette, Abydos, Vol. Paris, 1869, Pl. 51, 40ff に掲載されている)。

上述の文献は、王の玉座に着くことが、新年に Re (Atum と同一視)の出現するのと同じだと表現している。

天地創造記述は、その主神の絶対性を信仰者の前に示すためであった。それゆえに国家的広範囲に信仰的支持を得ていた神だけではなくて、州、町、村の小単位から支えられていた神殿の神も「創造神」としての崇拝を受けていた。その神々の中で王朝時代において最も顕著な傾向と言えるのは、太陽がすべての生物に対して生長の源泉と考えられていたことに原因して、太陽神が創造神となったこと。そして地域の見地から論ずるならば、政治の中心地であり、王宮の所在地メンフィスとヘリオポリスとその二大中心地と成り、その主神プタハ

とアトムは創造神としての崇拜において広い領域におよんだのも当然であった。

第1章 メンフィスの創造神話

さて最初に掲げる「メンフィスの創造神話」の中に、最も高い思考性を見出したのは James H. Breasted であった。彼は「新約のロゴス教理の古代史的背景を、此の創造神話に見出すことができるのではないか？」²⁾と疑問符をつけながらも、ロゴス教理の遠い原型をここに見出している。

資料 資料となる碑文「メンフィスの創造神話」と言われるものは、第25王朝すなわちエチオピア王朝に属する Shabako 王 (716—701B.C.) がメンフィス（これはギリシア化された名称であって原名は Men-Nefert. ただし便宜上、以下メンフィスという呼称を用いる）の Ptah 神殿に記したものである。さらに説明すれば横 $54\frac{1}{4}$ インチ、高さ $36\frac{1}{4}$ インチの黒花崗岩の石板に彫刻されたものであった。これは Earl Spencer によって1805年に大英博物館に納められた。

この碑文の二行目に、つぎのように記されている。

「王 (Shabako) は、この記録を父Ptah神の神殿に新しく記す。

王は祖先の王たちの作った記録を発見したが、それは虫によって腐蝕されていたので完全に判読し難い。それゆえ王は、それを新たに記録し、前の形より美しいものとし、彼の名が永続し、彼の記念碑が、父 Ptah の神殿において永久に存在するように」

さてこの文献は二、三の重要な特徴をもっている。

(a) これが、記録されたその原文は Shabako 王の時よりもさらに古くさかのぼるパピルスの文献であったと思われる。複写においてもその書体や用語は受け継がれているが、それは古文体的であって、Menes 王によって第一王朝が設定された 3400B.C. の頃のものであったと推定される。すなわちメンフィス (Men-Nefert) がエジプトの南北統一後において首都となった時のものであったと推測される。

(b) この文献の最初の部分は、小区分の短い節から成っていて、ホルスや女神たちとの対話の形で始められている。K. Sethe, *Dramatische Texte zu altaegyptischen Mysterienspielen*, Leipzig, 1928によれば紀元前2000年のパピ

ルスにすでに明確な対話形式の文体がしばしば見出される、と説明されている。

(c) 第一王朝の頃の記録が、紀元前8世紀の Shabako の時代までたとえ虫によって腐蝕されていたとはいえ、これがメンフィスの神殿内に保存されていたことは、エジプトにおいて記録尊重の気風が強くあったことを示している。記録の内容については後述するが、Ptah 神による天地創造を語るこの記録はメンフィスの主神 Ptah の行動を述べるものとして重要視されただけではなく、むしろ歴史を記録するに当って、その発端として創造記述が注目されていたものと推測する。なお、歴史記述については後述する。

内容 メンフィスの創造神話の文献が最初に写真となって公刊されたのは S. Sharpe, *Egyptian Inscriptions from the British Museum and other Sources*, London, 1837, I, Pls. 36—38. であった。これに関する解説としては、J. H. Breasted, *Z. Ae. S.*, XXXIX. 1901, S. 39—54. A. Erman, *Ein Denkmal memphitischer Theologie*, SPAW, 1911, 916—50. K. Sethe, *Dramatische Texte zu altägyptischen Mysterienspielen* (Untersuch. X, Leipzig, 1928.) などがその初期の研究書として注目に値する。

Ptah 神と「メンフィス創造神話」のもつ精神的、哲学的内容に関しては、すでに18世紀とそれ以後において早くから注目されていた。Jablonski, *Pantheon Aegyptiorum*, 1750. がその最初のものと思うが、Lepsius, *Abhandlungen* Berlin. Akad., 1851, s. 196において、この創造記述において「プタハ神は als eine geistigere Potenz と考えられていた」と説明している。H. Brugsch, *Religion und Mythologie der alten Aegypter*, Leipzig, 1885. s. 96—99. はプタハ神を“der göttliche Urgeist”と説明している。

いま、いわゆる「メンフィスの創造神話」の一部を訳してみる³⁾。

「ホルスよ生きてあれ、彼こそ(上下)二つの国(エジプト)を繁栄させるもの。二女神、彼等こそ二つの国を繁栄させるもの。金のホルスよ、汝は二つの国を繁栄させるもの、上下のエジプトの王である。

Sha [ba-ka] プター神の愛する者、Rē 神のように永遠に生きる。王はその父プタハの神殿の中に、(以下数行は前述したので、略す)」

「Shabaka 王は彼の父 Ptah-tenen のためにこのことをする、彼が永

遠の生命を与えられるために。

[48行] Ptaḥ と成った神々⁴⁾

偉大なる王座に着く Ptaḥ 神よ、

Ptaḥ-Nun として Atum を生んだ父、

Ptaḥ-naunet として Atum を生んだ母、

偉大なる神 Ptaḥ よあなたは九神の心と舌である。

[Ptaḥ] よあなたは神々を生んだ。

[53行] 心のゆえに存在となり、舌のゆえに存在となって、Atum は形成された。

(John A. Wilson は註解を付して「Ptaḥは考えたことにより、そして言葉によって創造神 Atum を創造した」の意味であると、説明している。)⁵⁾


(本文) [53行] 力強く偉大なる者 Ptaḥー 彼は生命をすべての神々に与え、また彼の心によって Horus が Ptaḥ になった。その心によって霊を与えた。彼の舌によって Toth は Ptaḥ になった。

[53行後半] つぎのことが起った。

心 (ib) と舌 (ns) が身体 (ḥt) の他の部分を支配した。Ptaḥ は彼の願うすべてのものを、思うことにより、舌で命令することによって、あらゆるものの中に存在し、すべての神々、すべての人間、すべての家畜、すべての這うもの、生きているすべての者の中に存在し、その口の中にいる。そのことを教えることによって、彼は支配した。

[55行のの後半] 目の視力、耳で聞くこと、鼻でかぐことは心に報告される。これによってすべての完結されたもの(概念)が現れ、心の思うものは、舌で発言される。

このようにしてすべての神々は造られ、九神は完成した。実にすべての神の言葉(又は「神の命令」)は、心で思うことによって、また舌が命令することによって、実現する。」

解説 (1) プタハ神。メンフィスの創造神話は、その主神プタハを主軸として記述されている。プタハ  はその神名から推論するならば「開く者」の意で、これはヘブル語 פָּתַח (Pāthach) と共通する⁶⁾。しかしこれと同じ類型の

アッカド語 *Patāḫu* は「生む」を意味しヘブル語の *Pāthach* は「門を開く」(イザヤ6:2, エゼキエル46:12)に用いられているのに対して、エジプト語の *Ptaḥ* は、このような意味でなく「刻む」「像を造る」の意であって、Brugsch, Wörterbuch, 1905, s. 528 が説明しているように *Ptaḥ* は「彫刻家」の意であった。しかしこのことはヘブル語との関係から見れば פתח *piel* 形が「彫刻する」を意味し(ゼカ3:9), また participle が פִּתְּחָךְ (*pat-hūach*) であり, 名詞が פִּתּוּאךְ (*pittuach*) であって, 「彫刻」を意味した〔歴代2:7(6), 14(13)〕。しかも後にP資料において「彫刻する」と動詞形に用いられている(出エジプト28:11, 21; 39:6, 14; ゼカリヤ3:9, 歴代下2:13, では石に彫刻する場合に用いられ, 出エジプト28:36; 39:30は金に, 列王上6:29, 詩74:6, 歴代下2:6は木に)。この意味においては, プタハという神名とヘブル語の *Pāthach* との間には類似点があると言い得る。

プタハが「彫刻する」の意であったことは, つぎの三点に関連すると考えられる。

(イ) プタハ神は, 多くの文献によればその起原において細工人, 石工, 金属工たちの間で崇拝された神であった。このことは第二王朝の昔からプトレマイオスやローマ時代に至るまで一貫して変わらなかったことであった。

Teti のテキストの87行と97行に「プタハの作業場」(*kdt ptaḥ*) という句が見出されるが, これはプタハ神が死者の霊のために, 他界において生活するのに必要な身体を造るための作業場という意味である。

Pri-m-hrw (「日の出とともに出てくる」) すなわち「死者の書」の64章8行には「*Ptaḥ* は水晶をもって空を張った」と記され, 151章Aには *Mestha* が「*Ptaḥ* の命令に従って彼の家を堅固に建てた」とあるが, これらは *Ptaḥ* の宇宙創造に当って本来の建築師としてのわざに触れた表現であると言ってよからう。

Ptaḥ 神が陶工の用いるろくろを片脚で回転させながら巨大な卵を造っている絵画が見られる⁷⁾。この卵は世界を意味するものであった。

(ロ) 心臓すなわち心で思うことによって, 形が造られると云う前掲の「メンフィス創造神話」は, 彫刻家が石を刻んで形を造るという, 芸術家の構想と作

品との関係を、神の意思と形象との関係に類推したものと考えられる。

しかし上述の創造神話の53行に「Thoth が Ptaḥ となった」と記しているが、これについては Thoth についてさらに説明する必要がある。

Thoth 神はピラミッド・テキスト第954では、正義の神、裁判官のオシリスのかたわらで、死人の生前の行為の記録を手を持っていた。Thoth は神々の中で記録係であった。

現在カイロ博物館に所蔵されている文献の中に、太陽神 Re が「Thoth の果すべき役割」を定めている宗教的文献がある。Pritchard はこれを“The Assignment of Functions of Thoth”と名付けている。これは第18王朝の Tut-ankh-Amon 王の神殿の中と第19王朝の Seti I, Ramses II, 第20王朝の Ramses III のテーベに在る墓の中から発見された。文献の年代を想定するならば前14世紀の半頃から前12世紀の半頃までに記録されたものであろう⁸⁾。今これを Ch. Maystre の翻訳⁹⁾を参考にしながら訳してみると、

この偉大なる神（レー）は言った『トトを呼び出せ』と。そこでトトは直ちに連れられてきた。偉大なる神はトトに言った『神々よ見よ、空にあってわたしはここに正位置に在る。わたしは地下の世界パバの島に光が輝くように行動する。トトよ汝はそこで書記となれ、そしてそこにおる者たちに秩序を守らせよ。……汝トトはレー神の代理と呼ばれるであろう』

この文章で明らかになったことは、トト神が神々のうちで書記となったこと、またトトは秩序を守らせる神であったことである。

「メンフィスの創造神話」において、プタハ神が心に考えたことはトト神を通して発言され、それが実現して創造のわざとなったことに意味がある。

トト神は「神の言葉の主」と呼ばれた。これは、テーベの東岸、カールナックのラメセス3世（第20王朝の第2王）の埋葬殿の壁に画かれている文献によるのであるが、これによれば、神官長 Amenhotep はカールナック神殿の再建の功績により、王ラメセスⅨ（第20王朝の第8王）の前に呼び出されて次のような言葉を受ける。

「彼（神官長 Amenhotep）のため、彼を賞讃する言葉、神々の王なる Amon-Re の大庭において言われた言葉

『Montu が汝に恵みをたれ給え。神々の王なる Amon-Re Pere-Harakhte 神、南（上エジプト）の防壁、上下エジプトの生命の主なプタハ、神の言葉の主なるトト神、天の神々、地の神々が汝に恵みを与え給うように」。

トト神は神の言を司る神であった。つぎに Toth 神がこの「メンフィス創造神話」において、Ptah 神と関連しているのは、歴史記述の面においてであると考え。前述の如く、Toth はオシリス審判において書記の役割をしていたが、王の登位の場面においても、記録を記すこと、すなわち歴史記述の任務を与えられていた。例えば Hatshepsut 女王の王位継承の場面においても、この事は明かである。彼女は Thutmose III の王妃であったが、実は彼女の夫が即位できたのも Hatshepsut がテーベ系の正統な血統を継いでいたからであった。また Hatshepsut は事實は王妃であったが、王は背後に押しやられて王妃が政治上の実権を握り、彼女の後援者団体によって彼女の夫は、王位の座についていたとされている。

テーベのナイル河西岸の Der el-Bahri¹⁰⁾ のアメン神殿は新王国の発端すなわち第18王朝の始め Ahmose I (前1567—44) によって建てられたのであるが、その壁画には、Hatshepsut がアメン神の前において王となる宣言をする場面が画かれている¹¹⁾。

この場面によると Hatshepsut は王の服を身につけ上下のエジプトの王を示す二つの王冠を載せ、アメン神の前に立っている。その背後に Sefket と Thoth が記録をとっている。その記録はその側に彫刻されたが、のちに女王を排斥する者によって削り取られたが、ただ現在では Thoth の言葉として、

「汝はこれを汝の王冠として〔頭の上に〕置く」が読みとられる。

Thoth 神はこの重要な言葉を記録した神であった。それゆえに Thoth は言葉をつかさどる神であったことは明白である。Ptah は Thoth を舌と言葉として働かせていたと Budge は説明している。¹²⁾

Ptah の心に思うことが、言葉となった、という創造神話の一段階は Thoth 神が関与したことを基本として説明することができると思う。

なお言葉が物となる、言葉が世界を創造するという「メンフィスの創造神話」の特徴は、その背景となっているものをつぎのように纏めることができる。

第1は言葉と秩序との関係であって、前述の「Thoth の果すべき役割」の中に Thoth は「そこにおける者たちに秩序を守らせる」こと、それが書記としての彼の役割に当然付随することと考えられていた。言葉と秩序、これが言葉と世界との関係の基本であった。

第2に Ptah が彫刻家なる神であったことは、心の中で思われていたものが、石材の中に刻まれる作業を通して具体化してゆく事から類推されたことであろう。

「メンフィスの創造神話」と呼ばれているこの文献の最初の部分に、既に引用したように「彼の名が永続し、彼の記念碑が、父 Ptah の神殿において永久に存在するように」と記されていたが、この碑を建てた Shabako 王は自分の名が後世に永く残ることを意図した。これが歴史記述をなした重要な意図の一であったが、これを原始から始めたことはヘブル文献、創世記と同一であったと言うことが出来る。

Ptah はその起原において、上述の如く、「造るもの」ではあったが、自ら太陽神ではなかった。メンフィスの創造神話の特徴の一つは、Ptah が究極的存在として一なる神であり、それが機能的に活動する神々を創造して8神とし、その始めとして Ptah は自ら存在を続けた。

上述の「メンフィスの創造神話」の48行目から55行にかけて Ptah 自らを加えて9神が述べられているが、それは後述するヘリオポリスの創造神話における9神ほどには明確に記録されていない。メンフィス創造神話の49行の「Ptah-Nun は Atum を生んだ父」の句に現われているように、Ptah は原始の水である Nun と同一化されている（Nun は自らを創造する存在であって、自らはらみ、自ら生むことのできた神であった）。Ptah-Nun が Atum なる太陽神を生んだ、と記されている。Atum はのちに説明するように、Heliopolis の創造神話の主神であって、メンフィスの神話はヘリオポリスの創造物語をすでに知っていたと思われる。

エジプトにおける歴史記述 古代エジプトにおいて「歴史」という術語はなかった。しかしそれに代わる語と推測されるものは ꜥꜣ (gnwt) であって、この最初字 ꜥは kꜥ すなわち「骨」から起り「鋌」（もり）すなわち狩猟の道具に

転じ、後に gnwty は「彫刻家」を意味するようになった。要するにエジプトにおいては、「歴史」は「刻む」すなわち「記録する」から出発している¹³⁾。

歴史の内容、記述の内容に関連して説明するならばエジプト人も、(1)他の古代オリエントの人々と同様に、源始すなわち宇宙の起原について特に強い関心を持ち、歴史をこの源始から説き起こしたことは前述のとおりである。それに加えて「メンフィスの創造神話」の記述が示しているように、(2)王が書記を通して記録にとどめることに努力をし、そうすることによって自らの名を後世に残すことを意図した。

(3) エジプトの歴史記述の特徴の一つは、初期の時代に神々がエジプトを統治した期間があったことを記していることである。例えば Turin Papyrus¹⁴⁾ をあげることができる。これは第19王朝すなわち前13世紀頃に記されたと考えられる記録であるが、実は18王朝の初期に書かれたものの複写である、と推定されている。これには300以上の王の名を記しているが、その発端は神々の治世であった。

エジプトの歴史について語るとき、是非共触れなければならないのは、ヘリオポリスの神官であり、史家であった Manetho である。彼が Ptolemaios II (前308—246)に献じた「エジプト史」も、神々の治世で始まり、前第4世紀の終り頃まで、31王朝に区分して年代記的に記述した〔現在原本は残っておらず、ヨセフス(紀元1世紀頃)の著書に断片的に引用され、其後のエウセビオス(4世紀)の著作などに、その「抜粹」が引用されている〕。

神々の治世の後には akhu (栄光ある者) すなわち神人(半神半人)が世を治めた時期のあったことを記している。

最初の王は太陽神(Re)であり、王はこの神の後継者と考えられた。H. Frankfort が述べているように、「創造者なる神の後を継ぐ者が王であった」(Kingship and the Gods, 1948, p. 148)。

また王はしばしば「生きている Horus」と言われていたが、当然の事ながら王は神々とは区別されていた。その一例として掲げるならば、テーベにあるアメン神殿で毎日行われていた儀式で、司式していた神官は「わたしは神官である。わたしを神に仕えるために派遣したものは王である」と2回唱えた(A.

Moret, *Le rituel du culte divin journalier en Egypte*, Paris, 1902, pp. 42—43, 55)。これは王と神の区別を自覚していたことを実証する。にもかかわらず、王の行為と天における神の出来事との間に共通するものがあることが、登位式戴冠式などに唱えられた祭儀文の中に見出すことができる。

つぎに注目しなければならないのはエジプトの歴史記述が、旧約の列王紀がそうであったように、王を中心としたものであったことである。その最も古いと見られるものはアビドスに建てられた Sethy I (第19王朝, 1300B. C.) の埋葬神殿の壁に刻まれた76の王名である¹⁵⁾。この王の名簿の特徴は、第2中間期のヒクソス王の名が除かれていたこと。Ikhenaten (又は Akenaton) の名と、Tutankhamun を含むアテン神の信仰者と見られた王の名を除いたことである。これはアテン神の信仰を異端としたこと、すなわちアテン神信仰者たちに対して一種の除名処分をしたことを意味する。歴史を書くことは、過去を裁判することであった。

第2の列王名はSaqqārahすなわちメンフィスの隣接地に見出されたRamses II (第19王朝, Sethy I に続いた王) の私的な墓の中に発見されたものである (これは現在カイロ博物館に所蔵されている)。この特徴はメンフィス中心の視点を露呈していることで、第1王朝の第6王であったと思われる Mr-ba-p (ManethoのMiebis) から始めていることも、この王がメンフィスに王座を確立した最初の王であったからである。この王名列伝も第2中間期のヒクソス王達を除いた。また Ikhenaten などの異端者たちも除名処分を受けているが、Hat-shepsūt が女王であったと云う理由からか、彼女の名も見出し得ない。

古王国時代の歴代王が残した碑文を見て、各王がその治世中に重要視し記録するに足ると考えたものが何であったかを知ることができる。最初に出てくるのは王の登位と、その前後に行われた儀式が記録されていて、そこには創造神を父とする王の位置付けが明示されている。その後には毎年忠実に行き、おろそかにすることのなかった神々への祭礼、敬神を示す神殿の新築または改築または増築と、神の像を神殿に捧納したことなどで、純粹に政治的な出来事と言えば、外征、鉱山の採掘、水溝の開削などであった。それらを読むときに各王がエジプトの上下両国の統一に意を用いたことを知ることができる。デルタ地

方の緑地帯以外には全長5760キロのナイル河の流域に限られていたというエジプト王国の地形は、北から南へと細長い国であったために統一を維持することは容易でなかった。第4王朝時代のエジプトは42州（ヘセプ）から成り立っていた（22 *hesep* は上エジプトに、20 *hesep* は下エジプトに）。創造神話はエジプトの統一がその原始から神々によって意図されたものであったことを示す。

第2章 ヘリオポリスの創造神話

序 Heliopolis

ヘリオポリス（太陽の町）はギリシア化された呼び名であって、古代エジプト人は *Ann* 又は *On* と呼んだ。この名称は旧約にも親しまれている名であった。ヘブル諸族がパレスチナに侵入して、彼等の定住区域が定められたとき、エルサレムはベニヤミン族の所有に帰した（ヨシュア18：11以下）。さてベニヤミン（右手[幸福]の子）という名前は、創世記35：18によれば、あとになって変更されたものであって、旧名は *ben-ōnî* であった。此の名をヘブル語から説明して「わが苦痛の子」と解釈されて、ラケル物語が付加されるに至ったが、これは真の起原を述べたものではなく、むしろこれは『オンの子』と訳すべきで、エジプトにおいてオンに住んでいた人々の一団を指したのであろう（なおベニヤミン族が定住した区域の北西にベテルの町があり、その東にベテアベンという村があった。ヨシュア7：22にこの名が出ている。この *Beth-aven* は七十人訳B写本によって、ヨシュア記18：13を読めば *Baiθwγ* となっていて、ここにもオンが出てくる¹⁶⁾）。

さてヘリオポリス（オンを用いず、以下通称となっているこのギリシア名を用いる）はおそくとも第5王朝の頃には太陽神の神殿があった事が明らかで、その神官長の妻と *Re* 神が交わり、第5王朝の最初の3人の王が生れた、という民話が記録となっている¹⁷⁾。

Palermo の博物館に1877年以後所蔵されている、いわゆる「パレルモ石」¹⁸⁾ にはエジプト統一以前から第5王朝の中程に至る王の列伝を記しているが、その中で第5王朝の *Userkaf* 王の第5年につぎの事が記されている。

「ヘリオポリスの諸霊に、パン20を献げ、各「」（原文不明）にビール、

Userkaf の領土の中の 36 坪の土地を献げる」。また同じ王はヘリオポリスに自分の記念碑を建てている。

これらによって、ヘリオポリスはこの頃すでに聖地としてまた首都として認められていた事を知る。

このヘリオポリスの創造神話の記録の原型は第 6 王朝 (2345B 年. C. 以後) の Mer-ne-Re (第 3 王) と Nefer-ka-Re (Pepi II) (第 5 王) のピラミッドの内側に刻まれていたものである。これはピラミッドの献納式において、Heliopolis の Atum 神が、混沌の水から起ったその源始を思い起こし、永生へと新たに生れることを祈願したものである¹⁹⁾。この神話は、のちに個人の永生信仰を確証するものとして、一般に流布されるに至った。

「ヘリオポリスの創造神話」は Atum 神を主軸として、上述の第 6 王朝のピラミッド・テキストに見られるものと、後述するように、「死者の書」(Prim-hrw) の第 17 章に現われているものと 2 種類がある。先ず「ヘリオポリスの創造神話」(ピラミッド・テキスト) から説明する。

本文²⁰⁾「オー Atum-Kheprer よ、汝は(源始の)丘の上に高く在ます。汝はヘリオポリスの ben の家 ben 石, ben 鳥²¹⁾のように立ち上がる。汝は Shu を唾(つば)から創造し Tefnut を唾(つば)と共にはき出した。汝は汝の腕をもって彼等を抱く。それは汝の ka(霊)が彼等の中にあるので、ka の腕がそうしているからだ。

あとの数行は Atum 神の腕が、この文章を壁に刻んだピラミッドの主人 Nefer-ka-Re すなわち Pepi II を守護するように、と祈っている。

「Atum 神よ、汝の守護がこの王 Nefer-Ka-Re の上にありますように、またこのピラミッドの上に、また Nefer-ka-Re のこの建設事業の上にありますように……」と。

われわれの関心は創造神話にあるので、その部分を記述するならば

「おお偉大なるヘリオポリスの九神よ、すなわち Atum, Shu, Tefnut, Geb,

Nut, Osiris, Isis, Seth, と Nephthys. これらは Athum が生んだ

神々、汝の名による九の弓を生むことに汝の喜びは大きかった。………」

Atum 神 について説明するならば、この名は動詞 temm (完成する) から

来たものと説明されている。さて本文の第1行目に Atum-Kheprer と記されているが Kheprer は甲虫をもって象徴されているが昇る太陽であり、Atum は沈む太陽であって、両者の間にあって Re は真昼の太陽とされていた。また Kheprer は創造神であって、その意味で Atum と同一化されたと考えられる。

Atum は王朝以前の時代にすでに太陽神となっていたが、ヘリオポリスの神官によってこの町の太陽神として受け容れられた²²⁾。Atum は人間の形をもって象徴されていた。

九神 (Pesdj netern)

上に引用したように、この創造神話に、ヘリオポリスの九神が列記されている。すなわち Atum, Shu, Tefnut, Geb, Nut, Osiris, Isis, Seth と Nephthys であった。

「偉大なる9」の句はすでにピラミッド・テキスト §177に見出されるが、その §1689には「9神の2倍」という句もある。これらはヘリオポリスと関連していたのであって、これはその神官たちが系統を重んじ、神々を一つの系類に纏めようとした意図から出たものである²³⁾。

最初に Atum 神の存在については、死者の書第17章を見なければならない。

そこには「わたしは Atum であり、Nun の中に存在したただ一つの神であった」とある。Nun とは混沌であって、原始の水であり、すべて存在するものの胚種がその中にあった。Atum は神として存在する最初のものであって、彼から他の8神が生れ出た。その過程を調べてみても Atum を創造したものは自らであって、一神であって配偶者として女神を持たなかった。Shu (宇宙の神)とその妹であり妻である Tefnut (霧や雨などの女神)は、Atum の唾(つば)から創造された。またこの両神が Geb (大地の神、男神)と Nut (大空の神、女神)を生んだ。これらの神々から Osiris (死者の裁判官であり、来世の支配者)と Isis (生産力、生殖力の神、女神)の二神と、Seth (悪の神、オシリスの兄弟で、オシリスを殺す)と Nephthys (原語では Neb-t Het すなわち「家の主婦」。後にオシリスの家政婦)が生まれた。

死者の書第17章

これは18王朝から21王朝まで(1567—1085年B. C.)に用いられていた「死者

の書」(pri-m-hrw)を台本としているが、その原本をたずねるならば、中王国(2050—1786年 B.C.)にさかのぼることができる²⁴⁾。

この文献はヘリオポリスで書かれ、したがって Atum 神を創造神とし主神とし Re と同一化している。創造神が死者に新生を与えることを願って保存されていたものである。

本文²⁵⁾「わたしは Atum, Nun の中にただひとりであった。わたしは、わたしが創造したものを支配し始めたときには、Re として現われた。

「彼は誰であるか」

「彼の創造したものを治め始めたとき、Re であった」。

これは Shu が高く揚げられる前、ヘリオポリスの丘の上にいた時に、王としての Re としてであった。

「わたしは自らによって存在した偉大なる神である。

「彼は誰であるか」

「自らによって存在した偉大なる神」水である。

彼は Nun であり、神々の父である。

他の説明によれば、彼は Re である。

「彼は自らの名を創造した。九神の主である」。

彼は誰であるか。彼は自分の身体の部分の名前を創造した Re である。彼に従うこれらの神々は、このようにして存在するようになった。

「わたしは斥けられることのない神々の中のひとりである彼である」

彼は誰であるか

彼は Atum, 太陽の円盤の中にいるもの。換言すれば、彼は天の東端に昇るときの Re である。

「わたしは明日(来世における新生)を知るものであり、昨日(死)のものである」。

彼は誰であるのか。

昨日とは、それは Osiris である。明日とは Re である。その日に主に敵する全ての者は、みな滅ぼされ、彼の子 Horus が支配者となる。

解説 (1) ヘリオポリス創造神話（ピラミッド・テキスト）の最初に掲げた文献には「汝（Atum）は汝の腕のをもって彼等（ShuとTefnut）を抱く。それは汝の ka が彼等の中にあるので、Ka の腕がそうしているからだ」の句が見出される。これは Atum 神が Shu（宇宙の神）や Tefnut（霧や雨の神）として働くこと、Atum の ka がこれら二神だけでなく、その後に出てくる九神の中にあり、彼等を動かしている、との考え方が表現されている。

(2) kaについて説明する。象形文字では𓂀 (ka) をもって表現した。上にさしあげた腕であって、支えるの意味であった。Ka は霊と訳するのが最も適当と思われるが、われわれの靈魂概念と全く一致するものではない。

ka は「生命」とか「生きる」ことと直接関係した語であって、Tel-el-Amarna 文献では Ha-ka-Ptah が Khi-ku-Ptah と成っているが、この ku はスメリア語では食物を意味した。ka も食物の意味を内に含めていた。霊としての Ka に関連する語として参考になるのは 𓂀𓂀 (kat) で、この字の中に ka が入っているが、この語の決定詞が示しているように、これは「働く」という字である。また 𓂀𓂀 (ka) の語は発音は全く同一の語であるが、その決定詞が示しているように、この字は「雄牛」を意味し、それが自然の持つ生殖力、生産力を象徴していることを思い合わせるならば Ka は霊であるが、それは神や人の中にあって、その身体を「活かす力」としての霊であった。

この他に ka を double すなわち「双子」と説明した学者がいた。その代表的な人物はかの有名なエジプト学者 Gaston Maspero で、彼は *Études de mythologie et d'archéologie égyptiennes* (Bibliothèque Égyptologie comprenant les oeuvres des Égyptologues français. I.) Paris, 1893 において double 説を説明している。

Ka が本人と双子的存在としての霊であることを証拠立てるものは Luxor にある Amen 神殿にある Amenhotep III（第18王朝、第9王、1417—1379 B.C.）の誕生の図である。

これを見ると嬰兒 (Amenhotep III の赤子姿) が ḥapy (Nile 河の神) の腕に抱かれて部屋に入るが、他にもう一人の子供がその後に画かれていて、これこそ ka である。

Der el-Bahri 神殿内部には幼児 Hatshepsut に乳を与える王妃 Ahmose の姿が画かれている²⁶⁾。それによると Ahmose は椅子に腰をかけ、女神がそれを支えている。王妃の前で幼児 Hatshepsut とその ka が乳牛の頭をした Hathor 女神から乳を受けている²⁷⁾。

このように、Ka は人間が生れると同時に生れ、本人と同じ形をして、本人を本人自体と共有している。これは宗教学的に説明すれば形像霊 (Bildseele) であって夢幻のうちに形像としてあらわれる超感覚的な第2存在と言うことができる。さらに上述の古代エジプトの壁に画かれた ka を見ると雛形霊 (miniature soul) と呼ぶことも出来ると考える。

Ka はその人自体と共に肉体を共有するのであるから、死と共に肉体が減びるならば Ka も消え失せる。しかし肉体がミイラとして保存されるならば、死によって一時離れた Ka も、完成して「開口儀式」(wpre) が行われたミイラが復活してオシリスとなるならば、Ka は再び、これと合体してミイラと共に永遠に生きる²⁸⁾。

この Ka は人間にあると共に、神にもある。上述の「ヘリオポリス創造神話」には Atum の Ka が Shu や Tefnut 神の中にある。そして Atum の Ka の腕が Shu と Tefnut を抱くと。これは Atum の霊 (Ka) が、他の神々の中にあり、彼等を活かし、彼等を働かせている、との信仰的思想である。一なる Atum が九なる神々の中にある、という思想である。

ヘリオポリス神話の第2の文献として上述した「死者の書第17章」における Atum 神信仰の特徴は、Atum が他の神によって造られたのではなく「わたしは自らによって存在した」と記述されていることである。

またこの文章全体が「彼は誰であるか」という問いかけが2回以上も繰返されているように、問い、答えると云う対話の形式を通して、Atum 神の本質が問われ「わたしは明日を知るものであり、昨日のものである」という、死を支配するものであり、明日という来世に人間を導くものとしての神であることを

明確に述べている。

Ramses II (第19王朝1320—1200B. C. 第4王)のKubbân Stela²⁹⁾にはつぎの句が見出される。

「王よ、あなたはあなたの父、ヘリオポリスの Atum の地上における、生ける姿である。鑑識はあなたの口にあり、知性はあなたの心にあり、あなたの舌の座は真理 (maat) の殿堂であり、神はあなたの二つの唇の上にある」と。

Breasted は, *Philosophy of a Memphite Priest*³⁰⁾ の論文において, Kubban Stela の「知性はあなたの心にあり……」がメンフィスの哲学の表明であると説明したが、しかしこれが「Atum 神の生ける姿」としての有り方、とされている点はヘリオポリスの神学であるとも思われる。

要するにエジプトにおけるメンフィスとヘリオポリスの二つの創造神話は、古代エジプトの哲学的思考に大きな影響を与えたことに注目しなければならない。

注

- 1) 通常用いられているのは、紀元前二世紀に属するものでアッシュルバニパール (668—625 B. C.) の図書館跡から発掘されたもの。Pritchard, ANET, 1969 に英訳が掲載されている。
- 2) Breasted, *The Dawn of Conscience*, Scribner, 1934, p. 34.
- 3) J. H. Breasted, *The Dawn of Conscience*, N. Y., 1933, pp. 29-42. H. Frankfort (ed.), *The Intellectual Adventure of Ancient Man*, 1946, pp. 55 ff. Pritchard, ANET, 1969, p. 4参照。
- 4) H. Junker, *Die Götterlehre von Memphis* (APAW, 1939) は「Ptahを形造った神々」と訳している。
- 5) Pritchard, *Ancient Near Eastern Texts*, 1969, p. 5
- 6) この事を指摘したのは E. A. W. Budge, *The God of Egyptians*, vol. I, 1904, p. 500 であった。
- 7) Ibid., p. 500挿入図。
- 8) Pritchard, ANET, 1969, p. 8.
- 9) Ch. Maystre, *Bulletin de l'institut française d'archéologie Orientale*, Cairo, XL, 1941, 93-98.
- 10) Der el-Bahri は、アラビア語で「北の修道院」であって、実物への名称が異様であるが、これは、この建物の変遷を物語る。最初 Hatshepsut が画いた壁画な

どは Thutmose II によって破壊され、この王の逝去によって再び彼女は王座に着き、その在位中はあまり進展せず夫 Thutmose III が登位した後には彼女は名前を削って自分の名を彫んだ。Ikhnaten 王の頃、この神殿の壁画その他から Amen 神名は削り取られ、Ramses II の時に復旧したが、それは技術的には拙劣なものであった。その後 Ptolemy IX (146—117 B.C.) すなわち Euergetes の名称をとり、Cleopatra の夫となった人物が少しく復旧したが、さらに其の後にキリスト教がこの地方に入って来たとき、この神殿を修道院にして、ある部屋はキリスト教の礼拝堂に変えられた。1894—96年に Edouard Naville (1926年死去) の指揮によって Egyptian Exploration Fund によって完全に調査され発掘された。その後の調査は Herbert E. Winlock の指揮によってニューヨークの Metropolitan Museum によってなされた。

- 11) Naville, Deir-Bahari; III, 1906, 59, 60.
- 12) Budge, The Gods of the Egyptians, vol. I, 1904, p. 15.
- 13) P. Montet, *Les scènes de la vie privée dans les tombeaux égyptiens de l'ancien empire*, in *Publications de la faculté des lettres de l'université de strasbourg*. Strasbourg, 1925, p. 291. L. Bull, "Nature of the Evidence for an Idea of History", in Dentan, *The Idea of History in the Ancient Near East*, 1955, p. 3.
- 14) Turin Papyrus はイタリアの発掘隊 Drovetti によって、メンフィスにおいて、19世紀の初めに発掘され、イタリアに持ち帰られ、Turin Museum of Archaeology に蔵められた。
- 15) E. Meyer, *Ägyptische Chronologie*, Berlin, 1904, Tafel I.
- 16) 基督教研究, 18巻2号の拙稿参照。
- 17) A. Moret, *Du caractère religieux de la royauté pharaonique*, Musée Guimet. Annales: Bibliothèque d'études, tome 15. Paris, 1902, pp. 66—67.
- 18) バレルモ石は0.435メートルの高さ、0.25メートルの幅、6.5センチの厚さの石である。これは王朝以前、南北エジプトの統一以前の王から第5王朝の中頃までの王の列伝を、その両面に記している。この記録に正しい翻訳と註解をしたのは H. Schäfer, *Ein Bruchstück altägyptischer Annalen*, Ausdem Anhang Abh. Berlin, 1902であった。
- 19) K. Sethe, *Die altägyptischen Pyramidentexten*, II, Leipzig, 1910, §1652—56.
- 20) K. Sethe, *Die altägyptischen Pyramidentexten*, II, 1910. J. H. Breasted, *Development of Religion and Thought in Ancient Egypt*, 1912. Pritchard, ANET, p. 3.
- 21) ben とは太陽神の意。ben 鳥は太陽神の化神。Heliopolis の聖樹の梢に、朝日

- と共に燃えた火から誕生した鳥であった。
- 22) E. A. W. Budge, *From Fetish to God in ancient Egypt*, Oxford, 1934, p. 238.
- 23) Salt Papyrus (British Museum, Salt 825, 1005 1) では九神は Re, Shu, Tefnut, Geb, Nut, Horus, Isis, Seth Nephthys であった。
- 24) 通常用いられているドイツ語訳は, H. Grapow, *Religiöse Urkunden*, Leipzig, 1915-17, S. 4-13. 又は G. Roeder, *Urkunden zur Religion des alten Aegypten*, Jena, 1923, S. 237 ff.
- 25) E. A. W. Budge, *The Theban Recension of the Book of the Dead*, vol. I, 1910. G. Roeder, *Urkunden zur Religion des alten Aegypten*, 1923.
- 26) Derel-Bahri 神殿は1894年から Naville の指揮した Egyptian Exploration Fund によって発掘された。Naville, *Deir-el-Bahari*, II, 46-55 に報告されている。
- 27) Breasted, *Ancient Records of Egypt*, 1962², vol. II, 210.
- 28) 「開口儀式」については、第3王朝と第4王朝の初期に栄えた書記 Mathen の墓に二回記録として残っている。その儀式そのものについては第19王朝の時代に属すると考えられる pri-m-hrw (死者の書) に図解として見られる (大英博物館, エジプト室第6室所蔵)。テキストの英訳は E. A. W. Budge, *The Book of Opening the Mouth*, 2 vols., London, 1909.
- 29) Kubban はナイル河畔, アスワンの南100km. この碑は Kubban 村の南部で Prisse d'Avennes によって発掘された。現在では Grenoble の付近の Uriage の Count St. Ferriol のシャトーに置かれている。最初に Prisse, *Monuments égyptiens*, XXI に発表された。その後 Philippe Virey, *Recueil*, XIV, 97, 98, 1900 に翻訳された。Blackman, *Journal of Egyptian Archaeology*, XI, 1927, 202, n. 5 参照。
- 30) *Zeitschrift für ägyptische Sprache*, 39, 1905.

(本学神学部教授)